

白門経友会

多摩キャンパスは、
桜が満開で
新年度を迎えております

長い冬が終わって暖かい日が続き、桜も例年より早く開花しているようです。

春は別れと出会いの季節です。三月八日には経済学部の教員の懇親会(経和会)が立川のパレスホテルで開かれ、長年本学の教育研究に尽力されてきた小口、高橋、佐々木、長野各教授、栗倉助教の送別の宴が催されました。白門経友会からは齋藤巖顧問が挨拶いたしました。



また、三月二十五日には卒業式が
挙行されて、経済学部では約一千名
を送り出しました。
引き続き、四月三日には桜の花の
下で入学式が挙行される予定です。



二〇一八年度の

新入教員について

四月より左記の先生が着任されま
す。

- 平繁 佳織 助教A(英語)
- 松八重 泰輔 助教A(経済政策論)
- 後藤 孝夫 准教授(交通経済論)
- 赤羽 淳 准教授(経営学)

なお、九月からは左記の先生が着
任されます。

- 宮錦 三樹 助教A(財政学)



自分本来の人生を生きるには

経友会常任幹事 高梨 明宏
はじめに

人は限りなく成長し社会に貢献する人もいれば、適当に生きる人、低迷する人、人間関係に苦勞する人、心因性病気に陥る人、他人に迷惑をかけたたり犯罪を犯す人、等々色々な人たちがいる。原因としてその育つ家庭に何があり、何に影響され、性格が形成され、一生を左右するのであるのか。ならば自分はどうのようになり気付き生きれば、満足する人生を送られるのか、考えてみたい。私は人生を終えようとしている身であるが、学生たちがより良い 4 年間を過ごし、また社会で活躍するために、そして先生方が学生たちの「性格」を考えて適切な指導をされるべきの参考になれば幸いである。

人は環境の子なり

人はいくら成人になろうとも、必ず幼児期の育てられ方に支配される、と多くの学生や社会人を観察して思う。芥川龍之介は「運命は性格の中にある」と箴言しているし、また昔から「三つ子の魂(性格)百までも」と言われるが、まさにその通りと思う。性格を変えられるのは本

人自身しかいないが、性格を自分で変えられないほどの精神の次元になると、真つ当な社会人になることは不可能になるのではないか。それは、社会的な転落に繋がり恐ろしい結果をもたらす。成績が思わしくないので、性格が左右していると考える。勉強の仕方が分からないでの場合もあるが、自己中心の思考回路になると、理解力が減退すると思う。その結果、成績が低迷するのを他人のせいにする傾向がある。できない学生(生徒)は、先生のせいにするので分かる。その前の自分の努力を怠っているのに、である。心の素直さが勉強には大事と思う。

私は41年間在職して実に多くの学生たちと付き合い、観察してきた。これは学生の時に五葉会で少々禅をしてきたので、「心」に関心があり、その影響かも知れない。成績が優秀で優良企業に就職する人はみな一緒に、心が明るく、元気で、人の話を一生懸命に聴き、何事にも頑張る、フレンドリーな性格であることに気付く。精神衛生上良いから何事も好転していくのである。結果、人からも好かれ、情報もどんどん入り、自分の考えも真つ当になっていく。

一方、甘やかされて育つと、過保

護の結果の自己中心の発想や、好きなものを買い与えられると何事にも我慢のできない性格に陥っていく。これは昔から言われていることだ。大きな渦の中に陥るように抜け出られなくなる。自分から相手に近づくことも出来ず、友達関係も構築されず、精神衛生上も悪くなり、暗くて元気がなく、諦めやすくなり、切れやすく、何事も長続きしない性格になり、悪循環を繰り返していくと思う。

そこで思い出されるのが、9年前に中央大学理工学部で起こった刺殺事件である。教授がかつての教え子に殺められるという痛ましい事件である。人付き合いが苦手な元教え子は教授に大学院の進学を相談したが、教授はむしろ社会に出てコミュニケーションスキルを上げることが勧めた。しかし、会社ではうまくいかずすぐに退職し、何度か転職したものの職場でトラブルを繰り返して、やがて正社員からアルバイトまで転落し、自分の人生がうまくいかなかった原因は教授にあると逆恨みするようになったとされる。「被告は妄想性障害にかかり、心神耗弱だった」と弁護士は主張した。

彼は母親から異常なほど溺愛されて育ち、母親は息子の望むものは何

でも買い与えたという。溺愛の家庭では、母親は子供に餌だけ与えて真の教育を怠ったり、本人の人生にとって本当に必要なことを授けてこなかったのかも知れない。このような母親は最近増えてきたように思うのは、私一人であろうか。

考えてみると、このようなケースの人は世の中に程度の差こそあれ、実に多いのではないか。甘やかされて育つ家庭は、何事でもうまくいかない原因は自分の外にあるという思考パターンを植え付けるマインドコントロールをほどこしているようなものである。もちろん、物事を真つ直ぐに見つめて自分が必要なことを考える習慣を身につけさせ、立派な生き方を教える家庭もあり、それはある意味で素晴らしいマインドコントロールだと考える。人は環境の子であるから。

オーム真理教事件の教訓

今年、地下鉄サリン事件含めすべての裁判が結審した。事件当時は、「信者は麻原教祖にマインドコントロールされている」と報道されたが、マインドコントロールされている人が「自分はマインドコントロールされていません」と発言したのは聴いたことがない。悪しきマインドコント

ロールのせいで、自分を客観的に考えることができなくなってしまうているのだろう。30年もたつて死刑や無期懲役刑を喰らつて今頃反省するのでは遅過ぎるが、中大の刺殺の事件もこの種のマインドコントロールの結果ではないだろうか。卒業後も親切丁寧に指導して下さった大恩ある先生に対して「恨み」を起こし、上手くいかないのは先生のせいだ：と母親に話したのかもしれない、たしなめるどころか、子供への同情の「顔キクラブ」なつてしまつていたのではなからうか。もし息子がそんな愚痴を言つても、真つ当な母親ならそうするように、子供に努力目標を論じていたならば、事件は起こらなかつただろう。母親が子供に論ずることをしないから：自分が正しい、と思うのである。人間の心理はそのように考えるのが自然と思う。この事件は、親と子の自己中心的発想の「性格」からの帰結と考える。思うに、我々の身近な人たちにも程度の差こそあれ、事件を起こさずとも、この程度の人は大勢いるだろう。今年、2月6日のNHKの報道によると、心の疾患を患っている人は世界で4億5千万人いるとのことである。恐ろしいことだが、人数的に

誰でもその一人になる可能性を常に抱えているかも知れない。自分が他人から奇異に思われた時、また精神異常に陥つた時、自分で気付くことができないところに精神疾患の恐ろしさがある。それを防ぐ最善の良い方法：自己チェックはないものであろうか。

賢者から生き方を学ぼう

宗教染みた話で恐縮だが、お釈迦様の教えの素晴らしさは宗教というより、人間として如何に生くべきか：哲学、の賢明な生き方を説いているところにある。その流れをくむ禅宗の公案の始めには、「父母未生前の本来の面目は如何に」という問いがある。すぐには解けない公案ばかりだが、①父母に深く感謝することに気付くことから人間としての第一歩が始まる：甘やかされて育つたのでは人として歩めない、という意味か。私が今まで見てきた学生で深く父母に対する感謝の念を忘れない学生は、よく勉強し成績もよく、応答性も優れ、良い企業に皆就職して卒業した。反対に、親が仕送りするのは当たり前だ：という感覚の学生は、お遊びサークルに陥り、勉強を怠り成績も悪くなり、就職でも結果を出せず、これを中央大学のせいにする者もいた。父母への感謝が、人間本来の生き方のできる第一歩とと思う。

次に大切なことは、②「多くの人がいて自分が生かされている」ことに気付くことだと思ふ。多くの人に感謝し自分で慢心を戒めれば、本当に耳があつて聴こえ目があつて見える人間に近づける。人間謙虚さを失えばどういふことになるか、説明を要しない。謙虚に生きることが全てを好転させ、結果を生み精神衛生上も良い方法だと思ふ。学生時代、佐瀬孤唱老師が、謙虚に生きるために：「自利利他」を学生たちに提唱され、また、「馬鹿は馬鹿なりに生きる、チヨロチヨロするな」、「大の大人が鉛玉一個で仲良くなつたり喧嘩したりする：そのような大人になるな」と一喝された。自分の考えを失わずに精神をより正常に保つためには、良い教えだと思ふ。

以上から、この①と②を、心に刻み生きていけば、心因性の病気は自ずと防げ、勉強にも仕事にも結果が出て、友人職場関係も自然に好転し、人生を心豊かにおくれるようになると思ふが、如何か。因みに、この①と②を今まで学生や高校生受験生に話し、随分と結果を残したと思つて

いる。私の話を聞いた学生や高校生は、心が穏やかになり(謙虚)、自らが活性化して目覚め、勉学に励むようになったと思ふ。因みに私の在職中の話ですが、ボクシング部ウェルター級学生王者で4年生のO君がいました。成績は体育実技と他に少々修得しているだけでした。彼に、専門科目の勉強の仕方とわが子を思う父母の気持と父母への感謝の話をしました。両親の話を聴いていた彼は、じつとつむいて目を真つ赤にして聴き入っていました。心から彼が宿つたと思ひました。それから彼は毎日授業に出席し、2年間で見事卒業しました。説法じみた話、お許しの程。



研究の合間に② 私を経済学に導いた「誤解」

米田 貢

毎年就職活動を始める3年のゼミ生に対して、「働く」ことの意味、経済的に自立することの楽しさを伝えることにしている。その中で、時々、「先生は、なぜ経済学者になったのですか」と尋ねられることがある。はじめは適当に答えていたが、10年以上前に自分なりに記憶を整理してみた。

事の始まりは、1958年の冬のある事件だった。県庁所在地の富山市のほぼ中心地に住んでいた我が家であったが、当時は内風呂などほとんどの家になく、お風呂といえれば銭湯通いの時代であった。3人兄弟の末子で母親の「金魚の糞」であった私も、小学校にあがってからはさすがに兄らについて銭湯に行くようになっていた。寒い冬のある晩、お袋が銭湯に行っている間に、二人の兄たちが、ポン菓子(今の若い人にはわからないかな)の取り合いで大喧嘩になった。組んずほぐれずの闘いで、ポン菓子の入った一斗缶が吹き飛び、居間中にポン菓子が飛び散った。

帰ってきた母親が戦場と化した居間に入ったきた時の形相は、今でも脳裏に焼き付いている。「仏様」のお袋(末っ子の私にとつての話であるが)が怒りに満ちた顔で、「あんたらのお父さんは、食べ物のことなんかで子供に喧嘩させるような生活はさせてはいないんだ」と啖呵を切るや否や、3人を並ばせて思いっきり頬をひっぱたいた。それから、座敷の横にあった布団入れの押し入れに3人とも2時間ほど閉じ込められた。暗い中で、なぜ僕までがこんな目に合うのかと、悲しかった。それからほぼ半年後、現在の平成天皇と「庶民」出身の美智子さんの結婚式・パレードが、日本中のテレビ、ラジオをにぎわした。家のテレ



ビだったかどうか、記憶は定かではないが、その報道を見ながら、「この人たちは、食べ物の取り合いで喧嘩したことはないだろうな」とふと感じ、自分の家の「貧しさ」を自覚した。それが、私の「貧困」問題との最初の出会いであり、その時の悲しさが、高校時代には、「どうしたら貧困をこの世から失くせるのだろう」という問題意識にまで発展していた。

この話を、17年前に亡くなった父親に、話したことがある。年老いた父親は、笑いながら、「あの当時は、売薬業(これも若い人には分からないでしょうね)は実入りの良い職業で、普通のサラリーマンの3倍の所得はあったぞ」と話してくれた。父親の急死によって、家族を養うために突然旧制中学を退学し、親戚のおばさんの口利きでおやじが売薬業を始めたのを、その時初めて知った。そうでなくては、3人の息子たちを大学(しかも二人は県外の大学・大学院)にいかせることはできなかったはずである。幼い時のとんでもない「誤解」が、私を経済学の世界に導いたわけである。

この話の後日談。大学院の浪人中に結婚をし、初めて育英会の奨学金

を申請した。その際、連帯保証人としてのおやじの所得証明を見てびっくりした。そこには、およそサラリーマンの3倍の収入(1950年代末とは時代も大きく変わってはいたが)とはかけ離れた所得金額が記されていた。財政学でよく言われた九・六・四を実感した次第である。

編集後記

年度が改まり新生たちが期待に膨らませてキャンパスにやってきます。彼らの期待に応えるべく毎年気の引き締まる思いです。

さて、本会では例年通り6月の第二土曜日、9日に総会を開催します。詳細は追って連絡いたしますが、是非ご参加いただきたいです。よろしくお願いします。

(幹事長 濱岡 剛)

2018年3月30日 第68号
発行 白門経友会常任幹事会
編集 白門経友会編集委員会
〒192-0393
東京都八王子市東中野742-1
中央大学経済学部内
URL: www.wg-keiyukai.com
Fax: 042-673-3425